

2025 年 6 月 29 日（聖霊降臨後第 3 主日・特定 8、C 年）

牧師メッセージ

「神のみ心か、自分の思いか」

（ルカによる福音書 9：51-62）

司祭ヨセフ太田信三

これまでのガリラヤ地方中心の活動から、イエスはエルサレムへと歩みを向けます。エルサレムへの歩みとは、十字架への歩みに他なりません。その不安や恐れは計り知れません。そのとてつもない覚悟を、今日の福音では「イエスはエルサレムに向かうことを決意された。」と記しています。この「決意」という言葉は直訳すると「顔」です。神が定めたエルサレムでのその時へと、イエスは決然と顔を向けているのです。今日の福音では、イエスのこの決意と対比されるように、弟子たち、そしてイエスに従おうとする三人が登場します。

弟子の二人、ヤコブとヨハネはイエス一行を迎えることを拒んだサマリア人の村に、「主よ、お望みなら、天から火を下し、彼らを焼き滅ぼすように言いませんか。」と言いました。サマリア人とユダヤ人は、同じルーツでありながらも、歴史の中で相容れない関係になっていました。弟子たちにとってサマリア人は、今、村に入ることを拒まれたという意味でも、歴史的背景からも「敵」だったのです。「彼らを焼き滅ぼす」とは、敵ならば滅ぼしても良い、という恐ろしい考えの表れに他なりません。しかしもっと恐ろしいのは、「主よ、お望みなら」と聞いていることです。自分たちの望みを叶えるため、天の力を使わせて殺させて欲しいと主に迫り、神にそれを認めさせようとしているのです。ここにイエスと弟子との違いが鮮明に表れます。ご受難へ向かうイエスは、ひたすら神のみ心に従い、敵とされていたサマリア人のところにも訪れ、神の支配、神の救いを宣べ伝えようとなさいました。他方、弟子たちはサマリア人の命などどうでもよい。「敵」への憎しみに囚われ、すべての人を救おうとされる神の意思などそっちのけです。残念ながらそれが弟子たちでした。

続いて、イエスに従おうとする三名が登場します。一人目は条件をつけずにイエスに従うと言います。イエスは彼に、「人の子（＝主イエス）」の現実を包み隠さず教え、従う弟子も同じ境遇におかれることを伝えます。しかし、他の二人はといえば、弟子たち同様、神の意思よりも別なものとらわれていました。そんな彼らにイエスは、自分がこれから歩むべき道にまっすぐに目を向けるように諭されました。

エルサレムへと顔を向け、徹底的に神の救いの計画に従ったイエスにならい、イエスによって示される神の国へとまっすぐに目を向ける者にこそ、神の国は開かれます。そこに信頼して歩む先にこそ、なによりも良い物が用意されています。